

◆実践問題19◆

- 1回目
- 2回目
- 3回目
- 4回目
- 5回目

天延二年甲戌の年、疱瘡おこりたるに煩ひたま

ひて、前少将は、あしたに失せ、後少将は、夕べに

かくれたまひにしぞかし。

かの後少将は義孝とぞ聞こえし。御かたちいと

めでたくおはしまし、年ごろきはめたる道心者に

ぞおはしましける。病重くなるままに、生くべく

も覚えたまはざりければ、母上に申したまひける

やう、おのれ死にはべりぬとも、とかく例のやう

にせぎせたまふな。しばし法華経誦じたてまつら

むの本意侍れば、かならず帰りまうで来へしと

のたまひて、方便品を読みたてまつりたまうてぞ、

失せたまひける。その遺言を、母北の方忘れたま

ふべきにはあらねども、物も覚えておはしければ、
思ふに、人のしたてまつりてけるにや、枕がへし、

なにやと、例のやうなる有様どもにしてければ、

え帰りましたまはずなりにけり。後に、母北の方の御

夢に見えたまへる、

しかばかり契りしものを渡り川

帰るほどには忘るべしやは

とぞ詠みたまひける。

筆者=5

4=仏